千曲川―信濃川流域の先史文化

図1　細石刃を埋め込んだ骨製シャフト
推定復元：関口昌和氏

信濃川流域の細石刃集団の行動領域と生業のコントラスト

堤　隆

1．はじめに

後期旧石器時代終末期、年代でいうと今から約2万年から1万7000年前ほどの間、細石刃石器群という特徴的な石器群が本州に出現した。人々は押圧剥離という発達した加圧方法を用いた石器製作により細石刃と呼ばれるカミソリの刃のような石器を量産してシャフトに取り付け、生業戦略を展開した。本稿では縄文時代開始直前に位置づけられるこの石器群から、それを用いた人々の行動領域と生業について信濃川流域を中心に考えたい。当該河川については「千曲川」「信濃川」の両呼称があるが、ここでは同一河川であることから便宜上、「信濃川」に統一して述べる。

細石刃には、大きく3つの製作技法があり、稜柱系・削片系・分割系と呼ばれるものである（図2）。稜柱系は、石材を任意に分割し丹念な原形を準備しないもので、矢出川技法とも呼ばれ、ウズラの卵大ほどの小さな細石刃石核が残される（図3）。削片系は、両面調整体の楕円形もし

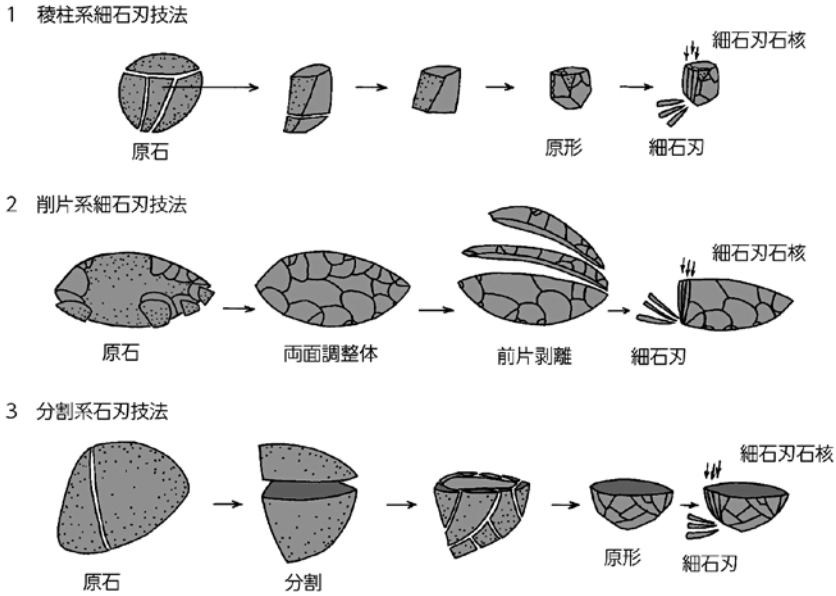

図2　三つの細石刃製作技法

図3　矢出川遺跡の細石刃石器群（稜柱系）
右奥の円錐形の石器で高さ2cm　写真提供：小川忠博氏

くは木葉形の丹念な原形を作成、削片と呼ばれる剥片を剥いで打面を準備し、細石刃を剥離するという周到な工程をもつものである。分割系は石材を大きく分割したのち舟底形の原形を製作するもので、あまり数多く存在せず、しばしば削片系の中に補完的に存在することもある。

したがって本稿では、稜柱系と削片系の２つに注目し論を進める。

2．信濃川流域の細石刃集団の残した遺跡

（1）信濃川流域の細石刃遺跡

信濃川流域には、最上流部にあたる長野県野辺山高原、そして長野県境以北の新潟県域にあたる中・下流部に細石刃遺跡が数多く存在する。それを残した集団は、定住生活を行わず遊動（移動）生活を営んだ人びとである。したがって、それらの遺跡は彼らの遊動の軌跡を物語っていることになる。

本州中央部の細石刃遺跡を図４に示し、本稿で扱う信濃川流域の主要な遺跡を表１に示して対応させた。信濃川最上流部の長野県には、野辺山高原に矢出川Ⅰや中ッ原５Ｂ、中ッ原１Ｇ遺跡がある。そして佐久盆地から上田・長野盆地の分布空白地帯を挟み、新潟県にあたる中・下流域には、

表１　信濃川流域の主要細石刃遺跡と石器組成

No.	遺跡名	所在	石器器種								
			細石刃技法	細石刃	荒屋形彫刻刀形石器	彫刻刀形石器	掻器	削器	錐状石器	細石刃石核	細石刃石核原形
1	矢出川Ⅰ	長野県南牧村	稜柱系	○				○		○	○
2	中ッ原５Ｂ	長野県南牧村	削片系Ｂ	○	○	○	○	○	○	○	○
3	中ッ原１Ｇ	長野県南牧村	削片系Ｂ	○			○	○		○	○
4	上原Ｅ	新潟県津南町	削片系Ｂ	○	○	○	○	○		○	○
5	正面中島	新潟県津南町	削片系Ａ	○	○		○	○			○
6	月岡	新潟県魚沼市	削片系Ａ	○	○		○	○	○	○	○
7	荒屋	新潟県長岡市	削片系Ａ	○	○	○	○	○	○	○	○
8	田井	新潟県見附市	稜柱系	○						○	○
9	高稲場	新潟県見附市	稜柱系	○						○	
10	中土	新潟県三条市	削片系Ａ	○	○	○	○	○	○	○	○

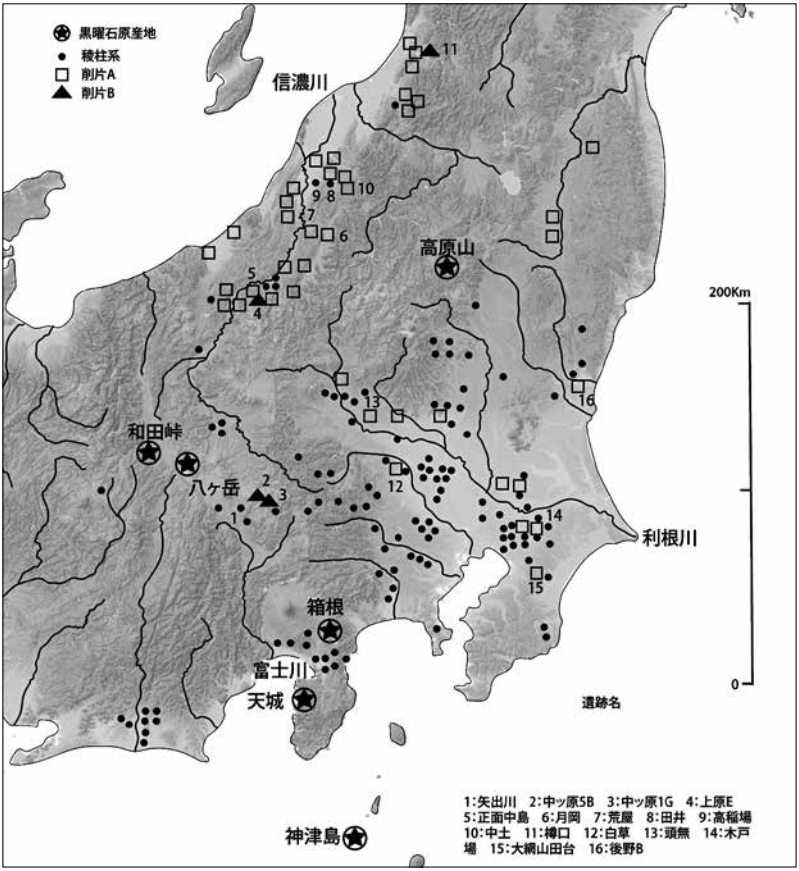

図4　本州中央部に分布する細石刃石器群

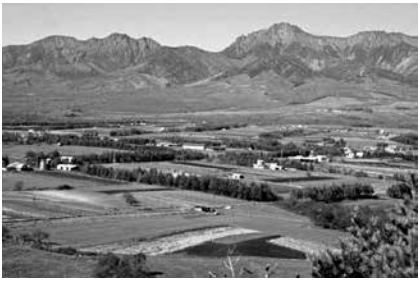

図5　八ヶ岳と矢出川遺跡（手前畑）

津南町上原Eや正面中島、魚沼市月岡、見附市田井、見附市高稲場、長岡市荒屋、三条市中土遺跡がある。このほかいくつかの細石刃遺跡が存在しているが、こうした遺跡をみると信濃川最上流域（野辺山高原）と、中・下流域（津南より下流域）とでは、明確に石器群の性格が異なっている。本稿では両者のコントラストからその生態と生業を考えてみることにしたい。

（2）信濃川最上流域の稜柱系細石刃遺跡

信濃川最上流域、八ヶ岳野辺山高原に特徴的に存在するのが矢出川遺跡群を構成する稜柱系細石刃遺跡で、とりわけ国史跡である矢出川遺跡（「第Ⅰ遺跡」とも呼称）がその中心をなす。その立地の大きな特徴は、標高1340mという高標高にあり、小河川である矢出川が貫く矢出川湿原を臨む場所に遺跡が立地する点である（図5）。

矢出川遺跡は、全国に1792か所ある細石刃遺跡のなかでもベスト5に入るほど細石刃の出土量が多く、5321点の細石刃が出土している。これは矢出川遺跡が繰り返し利用された拠点的な場所であったことを示している（註1）。

註1　堤　隆　編　2015『矢出川：日本列島で最初に発見された細石刃石器群の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ編

図6　信濃川と正面中島遺跡

矢出川遺跡の稜柱系細石刃にはそのほとんどに黒曜石があてられることが大きな特徴である。１３６２点の黒曜石原産地推定の結果、諏訪エリアが３４９点（約26％）、蓼科エリアが４０６点（約30％）、神津島エリアが３８９点（約29％）とそれ以外となった。遺跡から40㎞圏内の諏訪・蓼科エリアの黒曜石が相応に利用されていることはうなずける。しかし、直線距離で２００㎞ほどを隔て、太平洋島嶼部の神津島エリアの黒曜石の３割を占める持ち込みが、この集団の石材資源獲得のあり方を特徴的に物語っている。

（3）信濃川中流域下半部・下流域の削片系細石刃遺跡

信濃川中流域の下半部および下流域、行政区分でいう新潟県サイドには、稜柱系とはまったく製作技法の異なる削片系細石刃遺跡が、河川の縁辺部に分布する。それらは津南町正面中島遺跡（図６・７）や長岡市荒屋遺跡（図８）、魚沼市月岡遺跡（図９）、三条市中土遺跡などにみるＡ類と、津南町上原Ｅ遺跡（図10）に代表されるＢ類とに分けられる。

Ａ類の細石刃石器群は、山形県などを主たる原産地とする珪質頁岩を石器石材とし、荒屋型彫刻刀形石器を組成する石器群である。荒屋型彫刻刀

図7　正面中島遺跡の細石刃石器群〈削片系Ａ類〉
所蔵：津南町教育委員会

図8　荒屋遺跡の細石刃石器群〈削片系Ａ類〉
所蔵：十日町市教育委員会
写真提供：長岡市立科学博物館

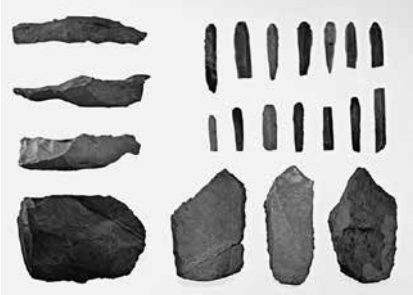

図9　月岡遺跡の細石刃石器群〈削片系Ａ類〉
所蔵・写真提供：長岡市立科学博物館

図10　上原Ｅ遺跡の細石刃石器群〈削片系Ｂ類〉
所蔵：津南町教育委員会

形石器は矢出川などの稜柱系細石刃遺跡にはまったく見られない個性の強い道具として、この石器群を特徴づけている。掻器も同様に稜柱系にはない道具である。とりわけその代表格である荒屋遺跡は、信濃川と魚野川という大規模河川の合流点に位置し（図11）、細石刃は矢出川遺跡を上回る6343点という膨大な出土量をみせる拠点的遺跡である（註2）。

B類の上原E遺跡には、珪質頁岩も含まれるものの、黒曜石を主体とし、長野県小深沢の黒曜石ほか、秋田県脇本海岸の黒曜石が用いられていた（註3）。細石刃技法は、A類には認められない湧別技法白滝型（打面に擦痕をもつ細石刃石核）が特徴的にみられた。彫刻刀形石器は存在するものの、典型的な荒屋型は含まれていない。先のA類の遺跡が信濃川本流の低位段丘に立地するのに対し、B類の上原E遺跡は信濃川の高位段丘の谷頭にあり、立地を異にしている。

3．細石刃集団の生業と資源利用そして遊動戦略

（1）稜柱系細石刃集団の生業と遊動戦略

矢出川遺跡の稜柱系細石刃集団は、おそらく湿原に集まるシカ類などの中型獣狩猟を主たる生業としたもので、時に八ヶ岳や和田峠周辺に黒曜石

註2
沢田敦　2014『荒屋遺跡』同成社

註3
佐藤信之　2018「正面中島遺跡を中心とした細石刃石器群の遺跡」『津南学』7　ほおずき書籍

図11　合流点に位置する荒屋遺跡　写真提供：東北大学考古学研究室

註4
堤　隆　２００３『氷河期を生き抜いた狩人：矢出川遺跡』新泉社

註5
池谷信之氏は、伊豆半島をホームゲレンデとする集団が、神津島産黒曜石の獲得にあたっていたと推測する（池谷２００４）。

図12　神津島恩馳島黒曜石原産地（筆者撮影）

獲得に向かった集団と筆者は推測している。また、標高１３００ｍを超すこの高原部はおそらく冬の居住地にはなりえず、夏季のキャンプ地として機能していたものと考えられる（註4）。

矢出川に持ち込まれた神津島エリア恩馳島（図12）の黒曜石の存在は、それ以前の彼らのキャンプ地を意味しており、それはおそらく採取地である神津島と伊豆半島を介して対峙する地域、具体的には愛鷹・箱根山麓であったことが推定される（註5）。この集団により、静岡―山梨―長野を結ぶ「富士川回廊」をさかのぼって神津島エリアの黒曜石が矢出川へともたらされたものと考えられる。あるいは、シカ類は夏季に高原部へと上る習性があるともいわれるので、愛鷹・箱根山麓集団がシカを追尾する傍ら神津島産の黒曜石が持ち込まれてきたのかもしれない。移動後はこの場所を拠点とし、八ヶ岳や和田峠周辺など信州の黒曜石が獲得されたのであろう。このように季節的な標高移動を行うのが稜柱系細石刃集団の遊動戦略であったと考えられる。

さらに稜柱系細石刃技術は、野辺山高原や愛鷹・箱根山麓ばかりでなく、相模野・武蔵野・下総といった関東に広がる特徴をみせており、信州エリアや神津島エリアの黒曜石利用も共通することから、この地域が稜柱

系細石刃集団のより広域なテリトリーであったと考えられる。ただ、この領域にどの程度の集団数があり、どのような相互関係をもっていたかを推し量るのはなかなか困難な作業である。

（2）削片系細石刃集団の遊動戦略と生業

削片系細石刃集団では、その分布域からも信濃川中流域下半部・下流域が主たる遊動の場だったと考えられる。信濃川の佐久盆地から上田・長野盆地には細石刃の遺跡は見当たらず、この空白エリアが、両集団相互の領域の独立性を暗示している。削片系の中には、荒屋や正面中島のように山形など東北地方産の珪質頁岩を利用するA類と、上原Eのように秋田産の黒曜石を利用するB類の2つがみられた。この二者については、B類が前出し、A類が後出するものと考えられており（註6）、時期の異なるものとみてよい。いずれにせよ搬入石材から両者は、東北地方からのベクトルをもつものである。削片系細石刃石器群が北方系といわれる所以である。

削片系の細石刃石器群をもつ集団に関しては、サケ科遡河性魚の捕獲という内水面漁撈と結び付けて議論され（註7）、筆者も内水面漁撈という生業を重要視してきた（註8）。長岡市荒屋遺跡は、信濃川と魚野川の合

註6
註3と同じ

註7
加藤晋平　1981「旧石器時代の漁労活動―先土器時代の生業を考えるうえで―」『信濃』33-4
佐藤宏之　1992「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29

註8
堤　隆　2011「内水面漁撈の導入をめぐる作業仮説」『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』雄山閣

註9
荒屋遺跡の性格に関しては、哺乳動物を対象とした狩猟のために形成されたという解釈もあり（鹿又２００３）、生業に関する議論が分かれていることに触れておく。

註10
堤　隆　１９９７「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定」『旧石器考古学』54

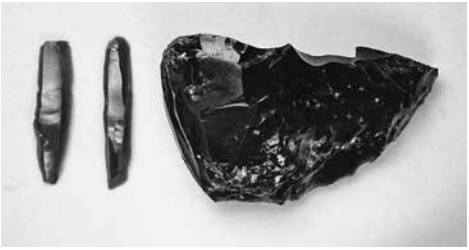

図13　中ッ原１Ｇ地点の細石刃石器群〈削片系Ｂ類〉
写真提供：八ケ岳旧石器研究グループ

流点に立地することが特徴的である。ここは『北越雪譜』にも記載されるように、古来よく知られたサケの産卵場所である。サケ科遡河性魚は、定まった時期と産卵場所をもつことから、その捕獲確実性と量的安定性とが集団の生活を保証したのだろう（註９）。

また、削片系細石刃集団が持つ荒屋型彫刻刀形石器は骨角器の製作に、掻器は皮革加工に用いられた道具とみられる（註10）。一方でこうした本格的な道具を稜柱系細石刃集団は持たないことからも、道具の装備を根幹とした生業活動の大きな異なりを予測できよう。

４．相互の細石刃集団の関係性

削片系細石刃集団のテリトリーは、主に信濃川中流域の下半部・下流域とみられるが、信濃川最上流部の野辺山高原の中ッ原５Ｂ地点や同１Ｇ地点（図13）において黒曜石の削片系細石刃石器群が散在し、逆に信州産（小深沢）の黒曜石が削片系の上原Ｅに存在することなども相互の地域の関係性を物語っている。一方で埼玉県白草遺跡や群馬県頭無遺跡など、関東に珪質頁岩の削片系細石刃石器群がみられるなど、おそらくは三国山脈を越境し、利根川沿いに流入する集団の様子がうかがえる。

図15　高稲場遺跡の細石刃石器群〈削片系Ａ類〉
所蔵：新潟県立歴史博物館
写真提供：長岡市立科学博物館

図14　田井遺跡の細石刃石器群〈稜柱系〉
所蔵：見附市教育委員会
写真提供：長岡市立科学博物館

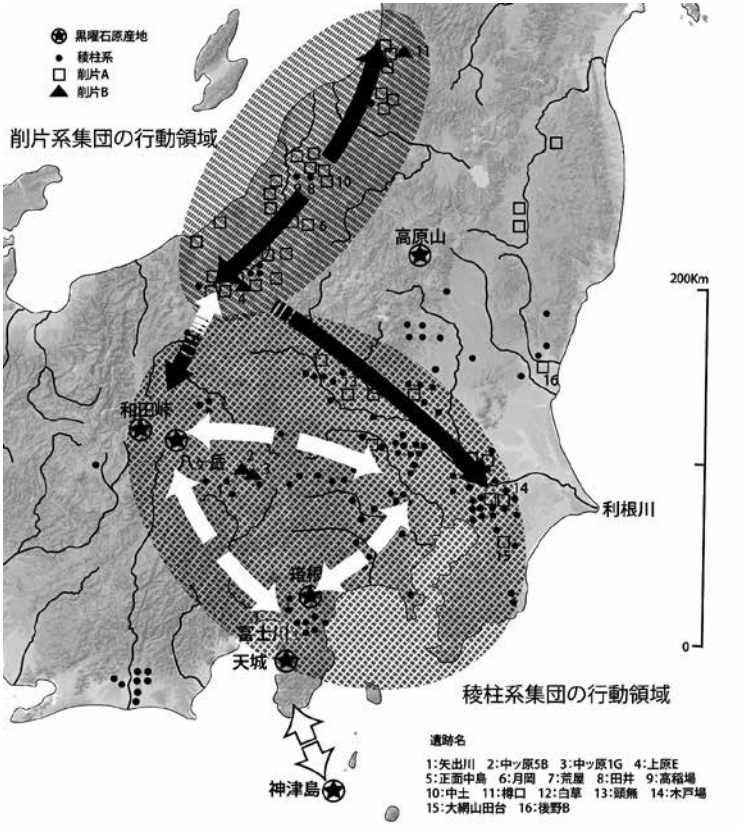

図16　細石刃集団と行動領域

一方、通常削片系細石刃集団のテリトリーとなっている信濃川下流域の見附市田井（図14）・高稲場遺跡（図15）では、稜柱系細石刃技術がみられ、信州諏訪エリア（星ヶ塔産）の黒曜石がもたらされていることが産地分析から判明している（註11）。こちらも逆方向の越境の事例といえる。

稜柱系細石刃集団は信濃川最上流部から太平洋側に、削片系細石刃集団は日本海側に行動領域を持ち、狩猟や内水面漁撈などそれぞれのエリアで独自な生業を営むというコントラストをみせながらも、相互に交流を持ったことがうかがえる。

註11
佐藤信之氏のご教示によると、文化庁建石徹氏の黒曜石産推定により、このような結果が出されているという。

裏表紙写真
星ヶ塔産の黒曜石製石器（津南町正面ヶ原Ａ遺跡）　撮影：小川忠博
焼町土器（御代田町川原田遺跡）　写真提供：浅間縄文ミュージアム
火焔型土器（津南町堂平遺跡）

本誌に掲載した記事・写真などの無断転載を一切禁じます。
全ての著作権は津南町教育委員会と資料所有者および機関に所属します。

千曲川―信濃川流域の先史文化

2021年３月12日　発行

編　集　津南町教育委員会
発行者　木戸ひろし
発行元　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012　長野市柳原2133-5
ＴＥＬ（026）244-0235㈹
web http://www.hoozuki.co.jp/
発売元　株式会社星雲社（共同出版社・流通責任出版社）
〒112-0005　東京都文京区水道1-3-30
ＴＥＬ（03）3868-3275

・落丁・乱丁本は、発行元宛に御送付ください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
・本書は購入者による私的使用以外を目的とする複製・電子複製および第三者による同行為を固く禁じます。
・定価は表紙に表示
ISBN978-4-434-28696-4